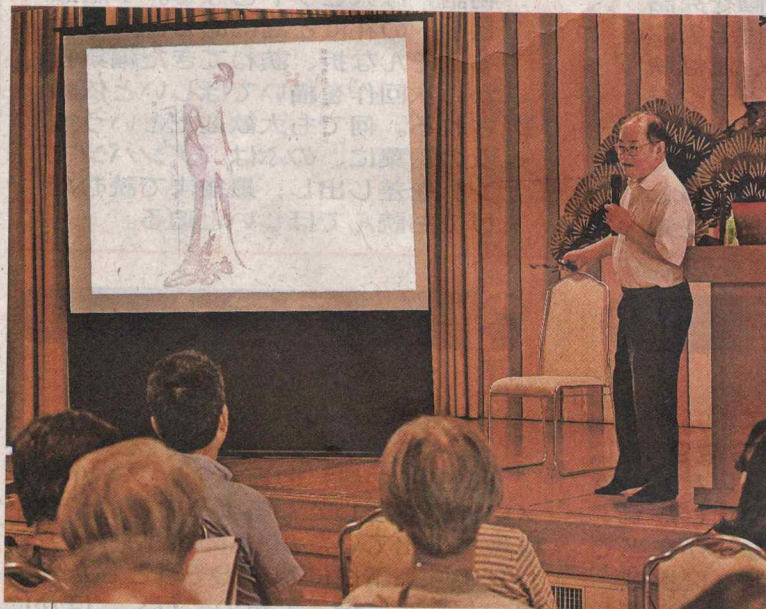


(第3種郵便物認可)

# 葛重のヒット戦略解説



「葛重版」の浮世絵の魅力を語る浅野さん

## 能代「べらぼう」浮世絵考証 浅野さん講演

NHK大河ドラマ「べらぼう」の浮世絵考証を担当する浅野秀剛さん(74)「奈良市」が6日、出身地である能代市の旧料亭金勇で講演し、ドラマの主人公である江戸時代の版元・葛屋重三郎(1750〜97年)が世に出した喜多川歌麿や東洲斎写楽の浮世絵の魅力を解説した。

## 歌麿や写楽、魅力も紹介

浅野さんは、歌麿が葛重の元で多くの美人画を手がけたことに触れ、「葛重はどのような作品がヒットするのかを的確に読み、歌麿の能力を最大限に引き出したのではないか」と語った。歌麿作品の魅力について「女性を官能的に描いただけでなく、心のひだを限られた線と色で巧みに表現したこと」と語り、代表作の数々を画像で紹介した。大胆な表現の役者絵で知られ、活動期間が約10カ月と短い写楽はその正体を巡り数多くの説が出されている。浅野さんは江戸時代の資料から、徳島藩の能役者・斎藤十郎兵衛が有力と指摘。「藩士だった十郎兵衛は絵を描き続けることで元の身分に戻れなくなると考え、筆を折ったのではないか」と述べた。

葛重は写楽の絵を大量に出版することで役者絵の人気を高め、市場を支配する狙いがあったとも推測。出版に当たって役者側の資金提供を受け、公演開始に合わせて発表するなどタイアップの関係があったことも解説した。

人気の出版物を出した版元が、他者による類似作品の出版を止めることができた当時の制度も紹介。葛重が差し止めを防ぐため、先行作品と違う判型で出版するなど知恵を巡らせたことも語った。

浅野さんは能代高1立命館大卒。千葉市美術館学芸課長などを経て、現在は大和文華館(奈良市)、あべのハルカス美術館(大阪市)の館長を務める。講演会は能代市で定期的に講座を開いている「市民おもしろ塾」が主催し、約130人が聴いた。

(佐藤辰)